

2006年2月19日 降誕節第9主日礼拝

『この道』

(エゼキエル3章4~11節、使徒19章8~10節)

パウロが、エフェソにいた時のことです。エフェソの教会の中にバプテスマのヨハネから洗礼を受けたという弟子たちがいました。その人たちは、聖霊というものがあるかどうか聞いたこともないと言うのです。パウロは、この弟子たちにいいました。バプテスマのヨハネは、自分の後から来る方つまりイエス・キリストを信じるようにと、人々に伝えたのであると。それを聞いた彼らは、イエスの名によって洗礼を受けました。イエスが約束なさった聖霊は、この人たちの上に注がれたのです。

このようなことがあった後、パウロは、会堂に出かけて行きました。他の伝道地でも、そうしてきたようにパウロはまずユダヤ人の会堂に行き福音を伝えようとしたのです。こうしてパウロは、三ヶ月の間、神の国のことを大胆に論じていきました。かつてイエスさまが、神の国のことを人々に伝えてきました。このイエスさまにならうように、パウロは会堂でユダヤ人たちに話したのです。パウロは、神の国とイエス様との関連を話していました。イエスさまのことを抜きにして神の国のことを語っても意味がありません。何故なら、イエスさまは、神様から遣わされた方です。イエスさま自身が、この地上に神の国をもたらず方なのであります。パウロは、神の御国を待ち望むように、人々を説得し、それと共に神の遣わした方イエスを信じるように人々に勧めました。今までの伝道地でもパウロは、イエスを信じることを人々に勧めて来ました。ここエフェソでもイエスを信じるように呼びかけたのです。

この時、イエスを信じたいと心を動かしていた人たちもいたかもしれませんが、9節「しかし、ある人々がかたくなで信じようとはせず、会衆の前でこの道を非難した」のです。ユダヤの多くの人たちは神の国を待ち望んで来ました。神の国が来ることは信じている。神の元からメシアが来ることも。けれども、イエスが神の遣わした方であるとは絶対に認められないということだったので。そのような人たちが、イエスの生前にもいました。ユダヤ教の指導者たちの中にイエスを信じなかった人が多かった。ということをおぼろげに聞いています。しかし、ユダヤの指導者ばかりではありません。弟子たちの中にもイエスがメシアとは信じられないという人たちがいたのです。イエスさまは、約三年の間伝道の生涯を過ごされました。その間、どこに行っても神の国について教え、病気の人を癒し、悪霊に取り憑かれている人を癒して来られました。その間、こんなことがありました。イエスさまは、口を利けなくする悪霊に取り憑かれた人に出会いました。その悪霊を追い出された時のことです(ルカ11章14~23節)。多くの方は、イエスのなさったことに驚き目を見張っていました。けれど悪口を言う人たちもいたのです。「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と。この人たちは、イエスさまを信じたくないで悪く言ったのです。それで、イエスさまは人々の心を見抜いて言われました。「あなたたちは、

わたしがベルゼブルの力で悪霊をおいだしているというけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。サタンでさえも内輪もめすることはない。悪霊が、悪霊を追い出すことなどあり得ないとイエスは言われたのです。悪霊を追い出すことができるのは、神の働き意外にあり得ないことであると。「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ（ルカ 11 章 20 節）。イエスさまが、おられるところに、イエスさまの御業が成されるところに神の国はあると言われたのです。しかし、イエスさまの言われた言葉を皆が信じたわけではないのです。イエスさまが、奇跡を行なっておられた場ですから。信じない人たちも、その場ではすぐに反対は出来ないと思いました。この時も人々は、何の反論も出来ませんでした。しかし、口には出さないけれどこの人たちは、イエスさまの言葉を信じてはいませんでした。イエスさまの言葉を、理解しようとしませんでした。信じない人々は、ことごとくイエスさまへの敵意を強めていったのです。

このエフェソの会堂でも同じことが起こったのです。パウロの語った神の国の福音、つまりイエスキリストの福音を信じようとしない人たち。この人々は、パウロを信じなかったのではありません。主イエスを信じることを拒んだのです。彼らは、「会衆の前で“この道”を非難した」（9 節）のです。人々は、キリストに従うことを拒みました。

パウロは、この人たちから離れていく他に道がありませんでした。弟子たちもパウロと共にこの会堂から退いていきました。パウロが、第一伝道旅行に行った時のことを思い起こさせます。ピシディアのアンテオケというところでパウロは会堂に行き説教したのです。神の御言葉が人となられた、ということパウロは、自分の言葉で人々に語りました。「神を畏れる人たち、この救いの言葉はわたしたちに送られました」（使徒 13 章 26）と。パウロの説教がこのように続いています。しかし、エルサレムの指導者をはじめ多くの人たちがイエスを認めようとしなかった。そして、イエスさまには、死にあたるような罪など全く見つからない。それなのに、人々は総督ピラトにイエスを死刑にするように要求して引き下がらなかった。そのために、イエスは何の罪もないのに人々の手に渡されて十字架に付けられて殺されていった。「こうして、イエスについて書かれている事がすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし墓に葬りました。しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです」（13 章 29～30）。この方による罪の赦しが告げられています。この方イエス・キリスト信じることによってわたしたちは神の前で義とされるのです。パウロは、最初の伝道旅行でもイエス・キリストの福音を大胆に伝えたのです。この集会の後も多くのユダヤ人や神をあがめる異邦人たちがパウロたちについて来ました。しかし、それを見て心を頑なにして福音を信じようとしない人がいました。この人たちは、パウロの言うことにことごとく反対したのです。パウロは、心を頑なにした人たちに向かってこう言いました。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。」（使徒 13 章 46）。

この時と同じ様な波紋がエフェソの会堂でもあったのです。イエス・キリストの言葉は常

に人々の中に波風を起してきたのです。神を信じる人たちの集まる会堂の中で神の遣わしたイエスさまに反対する人たちが出てくるのです。このことは、わたしたちに対する警告です。わたしたち自身が神様のために熱心に努めているつもりで実は反対のことをしてしまうことがあるからです。この世は、神に敵対する世界ですから。わたしたち信仰者の心にもイエスさまの道を曲げようとする思いや行ないが出て来るのです。「人々は、あなたがたを会堂から追放するだろう。しかもあなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考える時が来る」(ヨハネ 16 章 2 )。イエスさまが、言われたお言葉の通りパウロたちは会堂から追われました。イエスさまを伝えたためでした。

さて、会堂にいられなくなった、パウロたちはどうしたのでしょうか。パウロたちは、エフェソで御言葉を語る場を失ってしまうかもしれないと思われたその時でした。パウロたちは、ティラノという人の講堂に場所を与えられたのです。ティラノという人は、聖書ではここにしか出てきません。この人は、一体どのような人であったのか。単なる講義所の持ち主であったのか。それとも、自らも人々を教える哲学の講師をしていた人なのか。その点は、はっきりしません。いずれにしても、このティラノが、キリストを伝えるための場所を提供してくれたのでした。神は、ティラノを通してパウロたちに道を開かれました。こうして、パウロたちは、この場所で毎日のように、人々に神の国のことを論じていったのです。このようなことが、二年間続きました。パウロたちがエフェソで二年伝道した結果。アジア州に在住する人々は、ユダヤ人も、ギリシア人も、だれもが主の言葉を聞くことになりました。主の言葉を聞いた人々が、皆信じたとは書かれていません。しかし、すべての人がイエスは神のもとから遣わされたメシアであると聞いたのです。主イエスの言葉を聞いて反対する人たちが何時もいます。使徒言行録にもそのような人たちが出てきました。この数十年は、教会に対して大きな迫害はありません。しかし、これからどんな時代が来るのか本当にわかりません。教会も余りキリストの事ばかり言わない方が良いでしょう。しかし、わたしたちは何時も主の言葉を伝え、主の言葉を守り続けたいとおもいます。「わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子も、自分と父と聖なる天使たちとの栄光に輝いて来るときにそのものを恥じる」(ルカ 9 章 26 )、「幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である」(ルカ 11 章 28 )。主イエスの言葉を恥じることなく、真の幸いに与りましょう。 [説教者：堀地敦子牧師]